

幼小連携のカリキュラムについての研究 —「道徳性」「協同性」の育成—

中島 朋紀（初等教育学科・講師）・東 ゆかり（初等教育学科・教授）
佐藤 康富（初等教育学科・教授）・荒松 礼乃（初等教育学科・講師）
西島 大祐（初等教育学科・講師）・島崎 真由美（鎌倉女子大学初等部・教諭）
白川 佳子（共立女子大学家政学部児童学科・准教授）

1. はじめに

子どもの発達や学びの連続性を保障するためには、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続や連携を図り、体系的な教育を組織的に行うことが重要である。異なる学校種を互いにつなぐことによって可能となる「学びの連続性」は、保育者や教師が幼児・児童の経験や培ってきた自信、そしてこれからの人格形成を大切にすることになり、ひいては子どもを一人の人・人間として大切にすることになる。また、意味ある学びは「生きる力」につながる。子どもたちにとっての学びの連続性を保障するために、人間の生涯を視野に入れ、他者とのかかわりのなかで共に培われる子どもたちの「道徳性」「協同性」の育成に即したカリキュラムとしての幼小連携について、本学の教育環境を基調としたフィールド研究、教育実践、指導方法などの調査・検討を目的とし、その現状理解を考察した。

2. 連携教育における学びの意義

本学においては建学の精神（教育理念「感謝と奉仕に生きる人づくり」）を基調とし、併設校の幼稚部（幼稚園）・初等部（小学校）の教育活動は構成・展開されている。そのため、幼児期の教育と児童期の教育の目標を「確かな学力」（「学びの基礎力の育成」）という一つのつながりとしてとらえている。幼児期から児童期の学びについては、「これまで経験し理解していたことが、何らかのきっかけから、興味や注意を向けて関わることになり、新たな面や新たな関係に気づき、これまでに理解し身に付けていたことと、新たな気づきがつながり、理解が広がり深まる過程であり、それによって新たなやり方ができるようになっていく過程」である。つまり、幼児期においては、学ぶということを意識しているわけでないが、楽しいことや好きなことに集中できる遊び事態に学びがあり、幼児なりに気づき疑問をもち、様々なことを考えたり、試したりしながら、自らの課題を探究、解決していくことのなかに「学びの芽生え」がある。他方、児童期においては、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうではない時間（休憩の時間等）の区別が付き、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めることで「自覚的な学び」が形成されるのである。小学校以降の学習につながる学びの芽生えがそこに認められるからこそ、幼小は学びによってつながっているものととらえられることができる。特に、接続期においては、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識の変容と両者の学びの調和のとれた教育を展開することが必要である。

（１）協同性の育ち

学びの基礎力の育成において重要なのは、子どもが人やものに興味をもってかかわるなかで、人間関係が深まり、学び合いながらある目的に向けて共に協力していくことが可能になり、他の仲間と共通の目的を見出し協同して遊び、学ぶことができるようになることである。また、集団活動のなかで、子どもたちが共通の目的をもち、遊びや学習などの活動を展開しながら、人とかかわることの充実感を体験し、自由で自律した個人として自己発揮と自己抑制を調整する力を育むことにより、他者に対して建設的になり自立への基礎を養うことになる。

【参考例】＊幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿

- ・いろいろな友達と積極的にかかわり、友達の思いや考えなどを感じながら行動する。
- ・相手に分かるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いの出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながらわかり合う。
- ・クラスの様々な仲間とかかわりを通じて互いのよさをわかり合い、楽しみながら一緒に遊びを進めていく。
- ・クラスみんなで共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、実現に向けて力を発揮しやり遂げる。

（２）道徳性の育ち

道徳心・道徳性を培うことは、幼児教育や小学校教育にも一貫して位置づけられる主要な指導項目の一つである。道徳心は「社会における善悪の判断基準として、一般に承認されている規範を守って、それに従おうとする心」である。ただ守り従うだけではなく、より理想的なものを求め実現しようとする心も道徳心である。これは、学習指導要領でいう道徳性とはほぼ同義語でもあるが、道徳性（心情・判断力・実践意欲と態度・習慣）を支える倫理的価値に関わる心情・心的態度である。子どもにとっては、道徳性の芽生えは規範意識の芽生えでもあり、協同的な活動・体験の育ちや子どもの心理的発達の間からも深く関連している。つまり、道徳性の形成は、仲間集団とのかかわりや生活を通して、道徳的規範や慣習的規範が子ども個人に内化され、行動の自己抑制や自己調整をとまなうことから規範意識の芽生えにもつながるのである。

【参考例】＊幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿

- ・相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いこととの区別などを考えて行動する。
- ・友達や周りの人の気持ちを理解し、思いやりをもって接する。
- ・他者の気持ちに共感したり、相手の立場から自分の行動を振り返ったりする経験を通して、相手の気持ちを大切に考えながら行動する。
- ・クラスのみんなと心地よく過ごしたり、より遊びを楽しむためのきまりがあることが分かり、守ろうとする。
- ・みんなで使うものに愛着をもち、大事に扱う。

- ・友達と折り合いをつけ、自分の気持ちを調整する。

3. 研究成果

(1) 幼小連携の実際

本学初等部の幼小連携にかかわる実践は、建学の精神を中核として、子どもたちにいろいろなもの（人・もの・時）とのかかわりの中で、「伝え合う」こと（協同性・道徳性の育成）を重視したカリキュラムの構築及び実践活動に取り組んでいる。幼小連携にかかわる活動を設定するに当たり、目標を分析・共有し、子どもへの支援・改善を図っている。「伝え合う力」をはぐくむための環境と援助の在り方という観点から、連携における子どもの育ちを分析した。

〈人とのかかわりを通した伝え合い〉

交流活動で初等部生に優しくしてもらったことで、幼稚部生も自分から積極的に活動し、自分より幼い子にも自然に優しく接することができるようになってきた。

〈ものとのかかわり通した伝え合い〉

小学校の授業（生活科「秋遊び」）を一緒に行い、学校生活を知ること、小学生になることへ喜び、安心感・期待感へとつながっている。

〈時とのかかわり・共に在る時間〉

自分を認めてもらい、受け止めてもらえる安心感をもつことができ、そのかかわりの中で幼稚部生も初等部生も共に自分の気持ちを素直に表現したり、相手に伝えたりできる。

幼小連携における交流活動を通して、子ども同士が互いに自己の成長の姿を重ねることが可能となり、より深く自己とのかかわりを共有することができた。

①伝え合う力をはぐくむカリキュラムの編成と取り組みの充実

本学初等部は、児童の課題を克服するために「言葉による『伝え合い』の力」をはぐくむことを重視している。このカリキュラムは、「人と人とのかかわりの中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言葉で伝え合うことができる児童」を目指し、児童に付けたい「国語による表現力と理解力を生か」せるように「話すこと・聞くこと」の系統的指導計画にしたがった育成をねらいとしている。初等部へ入学した児童が、自分の感動や思い、考えを伝えたいような環境を工夫し、自分の言葉で表現できるような援助を行ってきた。そして、相手に伝わる喜びを味わい、相手の話を理解して、言葉による伝え合いができるように実践を進めてきた。

初等部では、幼児期で身に付けた伝え合う力をさらに高めるために、国語科を中心として、生活科、道徳や特別活動（学級活動・学校行事等）との横断的連関を図り、伝え合う力を高める授業の創造にかかる実践を行っている。さらに、他教科や教科外指導でも「交流の場」を意図的に設定したり、自由研究発表会や鎌倉カルタ・百人一首などを取り入れたりするなど、言語活動の充実を図るようにしてきた。

②交流カリキュラムの編成と交流活動の実践

以前から行っていた幼小の交流活動をより高めていくためには、交流が単なるイベント

に終わらず、活動を通して幼児・児童お互いが学び合い、育ちが見られる場にした。そこで、建学の精神にある「人・もの・時（共に在る）を大切にするところ」をはぐくむねらいを明確にし、「かかわり・伝え合い」「気付き」「充実感」の三つを視点とした援助・支援に留意した。これらの指導をもとに幼小の教員が共通した支援・援助を行うことにより、児童と幼児が進んでかかわろうとする姿が見られ、活動に浸り、充実感を高めることができた。

ねらいを明確にした計画的な幼小交流の活動は、幼小接続期における人的環境や物的環境を緩やかに連結できる取り組みとなり、幼小教育の円滑な連携への一方策となった。

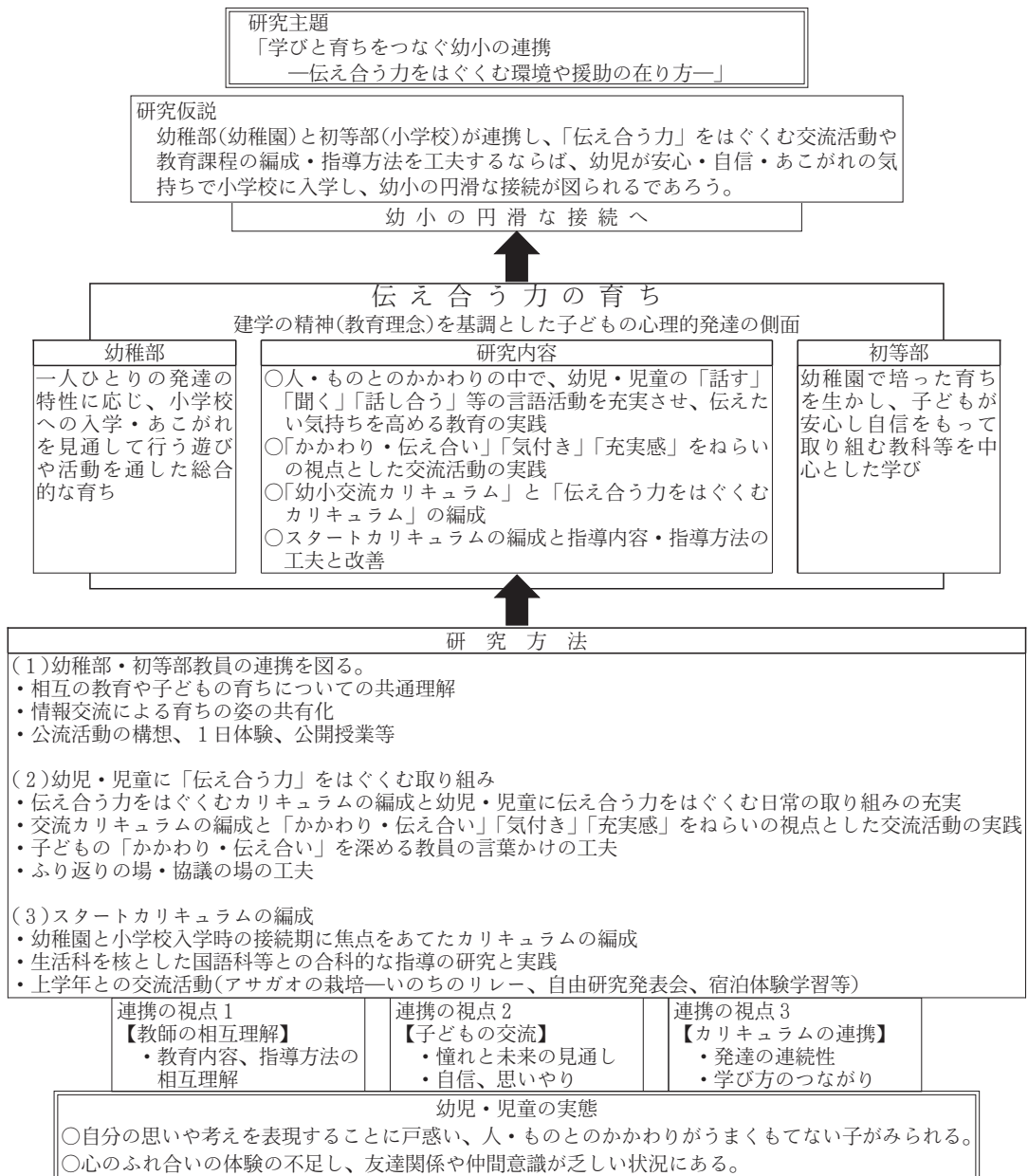


図1. 研究の全体構想

③スタートカリキュラムの編成

初等部では、生活科と国語科の合科的な指導を意識したスタートカリキュラムの編成を試みた。『小学校学習指導要領解説 生活科』では、「4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することができると考えられる。……大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である」¹⁾と記述されている。カリキュラム編成においては、幼稚部・初等部の教員が子どもの幼稚園での生活や教科学習への接続を観点として協議し編成を行った。

生活科においては、「名刺交換」や「学校探検」の単元の学習をする際には、「品位ある児童」の育成を目指して「基本的な礼儀作法」としての礼法指導や、国語科では「挨拶の仕方」「礼節ある態度」「質問の仕方」などを学習することにした。また、先生にインタビューして分かったことや「伝えたい」という意欲を生かして、国語科や図画工作において文や絵で表すなど、それぞれの教科のねらいを踏まえた表現活動を合科的に行った。まとめたことを発表会などを通して友達に知らせることは、よりよい価値の追求のために各々が考えを巡らせて表現し合い、「主体的な伝え合いを通して、深め合う」力の育成につながるようになった。

スタートカリキュラムにより、限られた時間の中で余裕をもって有機的な学習を展開することができた。このことは、仲間の一員として共に生活を織りなしていく大切な児童の姿であり、これらの経験を積み重ねていくことで、一年生の学校生活への意欲や協同性をより高めることにつながったと考える。

〈教科等とスタートカリキュラム〉

学校探検を通して、様々な力を身に付ける子どもたちであるが、その手段が、各教科等と密接につながっている。例えば、職員室や教室の入り方に関わって、国語の教科書を開いて、挨拶の仕方を学習する。発見したことを発表し合うときは、同じく国語の話し方、聞き方を学習する。一年生は、「もう小学生です。」という自信から、早く教科書を開いて、一人前のように自分の机で学習したい。そういった意欲ある自己表現を、スタートカリキュラムとして各教科等の学習につなげていく、それはねらいに向かうために欠かせない。

（２）豊かな心をはぐくむ道徳授業の実践

初等部では、建学の精神に基づき、初等部生として「私たちのちかい」を進んで実践する児童の育成を目指し、身の回りのことに気付き関心をもち、多様な課題に立ち向かっていく豊かな心をはぐくむことを大切にしている。子どもたちが将来の夢や希望をもって生きるには、幼児期から道徳性を芽生えさせ、多様な体験活動の充実を図る必要がある。発達段階に応じた道徳教育を通して、子どもたちに豊かな心をはぐくみ、よりよい生活を営む人に成長することを願っている。そのためには系統的に多様な体験活動や「人・もの・時」とのかかわりが大切となる。学校教育においては、日常生活の中で友達や身の回りの人とのかかわりを通して自己の生き方を振り返り、考え、「伝え合いから深め合う」授業の推進に取り組んでいる。

初等部では、学級担任が組織的、意図的、計画的に道徳授業（総合単元的道徳学習）を推進している。全学年・学級の道徳授業が、道徳的価値についての内容理解、自己理解、

他者理解を意識した指導の充実を図っている。道徳授業の展開では、各学年、道徳資料を通して、友達のを考えを共有しながら、自己の生き方を考え、道徳的価値の自覚を深めていく指導を行っている。

①よりよい他者との関係を育む道徳授業の展開（第1学年）

〈子どもの実態〉

小学校生活の始まりである子どもたちにとって大切なことは、日々の生活を充実させることである。そのためには、子ども一人ひとりの自尊感情を高め、元気に明るく意欲的に過ごせる雰囲気づくりをすることが求められる。しかし、入学当初の子どもは、自己中心的な言動により、友達との些細なぶつかり合いやトラブルが絶えない。このような子どもたちに少しずつ集団の中での生活において、よりよい他者とのかかわりを考え豊かな心をはぐくむ必要がある。まずは、友達と仲よく生活できることである。そのためには、友達の立場を認め、理解することが必要である。

〈授業の実際〉

導入で興味・関心を喚起するためにペープサートを活用して鳥（みそさざい・うぐいす・やまがら）への関心を高め、みそさざいに対して感情移入をし、子どもの理解を深めるように資料「二つのことり」を読み聞かせた。

第1発問では、迷いながらも明るい方（うぐいす）、自分の好きな方向に行ってしまったみそさざいに共感することを意識した発問をし、子どもたちからは、以下の発言が見られた。

- A 楽しいから、うぐいすの家に行く。
- B 私もみんなが行った方に行くだろう。
- C やまがらの家は遠いし、みんなうぐいすの家に行っているの、私は、みそさざいといっしょの気持ちで行ったと思う。

第2発問では、みそさざいの心の揺れに気付くような発問（モラルジレンマ）をし、子どもたちからは、以下の発言が見られた。

- A やっぱり誕生日（やまがら）だから行ってあげようと思った。
- B やまがらが、ひとりで待っていることが気になった。
- C みそさざいは、うぐいすの家にもやまがらのことが気になり考えていたと思う。
- T どんなことを考えていたのかな？
- C みそさざいは、うぐいすの家にも大丈夫だろうか心配ばかりしていた。
- D ぼくは、みそさざいが、やまがらのことばかり気になっていたと思う。

中心発問では、やまがらが心から喜んでいる気持ちと、そのことを共に喜ぶみそさざいの気持ちになって考えるようにした。

- A 遅くなってごめんねと思った。
- B 心の中では、迷ったけどやっぱり来てよかった。
- T 迷うのはどんなところでしょう。
- C うぐいすの家に行っていたけど、やまがらが心配になってきてどうしようかと思った。
- D Bさんと同じで、迷ったけどやまがらのところに行ってあげてよかったと思う。
- E やっぱり、誕生日をひとりで祝いするのはさみしいし、遅くなったけど行ってよかつ

た。

A ぼくもひとりの誕生日はいやだから、本当に行ってよかった。きっと、やまがらは、心から喜んで感謝している。

F みそさざいは、遅くなったことをあやまって、友達ということを言ってあげたと思う。次に、自己の生き方を考えさせることをねらって、「みそさざいさんのとった行動に対して手紙を書いてあげましょう。」と促した。

○みそさざいさんはやさしいよ。私もみそさざいさんみたいに友達のことを大切にできるようにします。(ワークシート)

○みそさざいさんも、やまがらさんのことが気になっているときはさみしかったと思います。やまがらさんのところに行ってあげてよかったです。私も、友達をさみしくさせないようにします。(ワークシート)

この1時間の授業構成は、自己理解のみではなく他者とのかかわりを通して子どもたちに豊かな心をはぐくむことができた。教師の授業への思いとペープサートを活用した資料の提示により、子どもの感心を高める資料提示になり、内容を十分に把握することができた。したがって、子どもたちは、自己の思いを十分に発表し伝え合い、自己とのかかわりで考え、お互いに道徳的価値を深め合う授業になっていた。

表1. 道徳授業の指導展開

主題名	友達と仲よくする心 学習指導要領道徳内容《2-3》	第1学年7月第2週 友情・信頼
資料名	二つのこり (学研)	
主題構成理由	みそさざいややまがらの立場に立って友達関係の問題を考えることを通して、孤立している友達の気持ちにも共感し、みんなと仲よくできる人間関係について考えることができるようにする。	ねらい 友達の気持ちを考え、仲よくする心情を育てる。
事前指導	豊かな体験＝他の教育活動との関連 学級活動・授業の中などで友達に親切にしている子どもを紹介する。 日常生活・日直、係活動、清掃などで、友達に親切にしている子どもをほめる。	家庭・地域社会との関連 ・友達を思いやり、親切にしている子どもを学級だよりなどで紹介する。 ・授業や行事の様子を学級だよりに載せ、子どもの保護者に知らせる。
本時の展開		
過程	学習内容 ○発問 ◎中心発問	留意事項
導入	○どんな鳥を知っていますか。 ・すずめ、つばめ、はと、うぐいす	○ペープサートを掲示しながら、資料への導入を行う。
価値の追究把握	○みそさざいがうぐいすの家に飛んで行ったのはどうしてでしょう。 ・楽しそう、みんなが行ったから ・やまがらのうちは遠いし、暗くてさびしそう ○みそさざいとうぐいすの家を抜け出すとき、どんな気持ちだったでしょう。 ・誕生日なのにかわいそう ・やまがらは待っているだろうな ◎目に涙を浮かべて喜んでるやまがらを見て、どんな気持ちになったでしょう。 ・遅くなってごめんね ・喜んでくれて、やっぱり来てよかった	○迷いながらも、他の小鳥たちと同じように明るく、自分にとって都合のよい方に行ってしまったみそさざいの気持ちに共感させる。 ○みそさざいの心の揺れに気付かせる。
ふり返り	○みそさざいに声をかけてあげるなら、どんな言葉をかけますか。 ・みそさざいさんは、友達思いですね ・やさしいね ・わたしも、みそさざいさんみたいに……	◎やまがらの気持ちを表現する。 ・やまがらが心から喜んでくれている気持ちと、それを見てみそさざいが「よかった」と感じる気持ちを考える。 ○自分のことへとふり返って、声をかけるようにする。
終末	○みんなは、友達にどんな接し方をしますか。 ・自分や仲間だけではなく、他の多くの人気持ちを思いやれるようにしたい	○友達と仲よくしていこうとする意欲を高める。

写真1. 内容把握のペープサート



写真2. 板書



4. 今後の課題

道徳性・協同性をはぐくむには、先を急がず、今の「時」に何が育つとよいのかを見据

えて、育ちの見通しをもち指導していかなければならない。子どもたちは、他者と共に在ることに気づき、友達の思いに触れ、かかわりを深め合っていく大切な時間を今過ごしている。子どもたちが互いを大切な存在として感じ合い、つながり合っていく幼小連携の取り組みが必要である。フレーベル（F.Fröbel, 1782～1852）は、その著『人間の教育』（1826）で、「全体としての人間」「生の合一としての人間」を理想としている。人間らしい成長や学びが幼児期・児童期それぞれに固有にあり、幼児期の学びが積み重ねられて小学校以降の児童期の成長へとつながる。やがて、子どもは外的にも内的にも調和した全体的な統一ある人間へと成長していくと考える。幼小連携の実践の積み重ねにより幼児・児童の実際の姿や教育内容への相互理解を深め、子どもを中心とした教員間の関係・意識が確かなものになり、指導の改善・充実がさらに図られていくことが望まれる。就学前教育プログラムの活用が連携カリキュラムや実態に応じたさらなる連携の工夫などにつながり、子どもたちが小学校でそのよさや持てる力を十分に発揮して生活や学習に取り組めるようにしなければならない。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』日本文教出版 2008年 45.
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領』教育出版 2008年
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍 2008年
- 4) 全国幼児教育研究協会編『学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望—』チャイルド本社 2006年
- 5) 佐々木宏子 鳴門教育大学附属幼稚園著『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム—』チャイルド本社 2004年
- 6) 無藤 隆著『幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える—』ミネルヴァ書房 2009年
- 7) 酒井 朗・酒井紘子著『保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—』ミネルヴァ書房 2011年
- 8) 高浦勝義・佐々井利夫著『生活科の理論』黎明書房 2009年
- 9) 高浦勝義・佐々井利夫著『生活科の授業づくりと評価』黎明書房 2009年
- 10) 神長美津代著『はじめよう幼稚園・保育所「小学校との連携」—実践事例集—』フレーベル館 2009年
- 11) 秋田喜代美著『保育の心もち』ひかりのくに 2009年
- 12) 秋田喜代美著『保育のみらい』ひかりのくに 2011年
- 13) フレーベル著 荒井 武訳『人間の教育』（上・下巻）岩波文庫 1964年
- 14) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに 2005年
- 15) 文部科学省『幼稚園における道德性の芽生えを培うための事例集』ひかりのくに 2001年